

## 活動報告書

報告者氏名：伏見薫

所属：一色小学校（神奈川）

記録日：2013年2月28日

### 1 Aさんのようすと課題

(1) 学年 6年生（女兒Aさん）

(2) 障がい名 弱視

(3) 障がいの困難と課題

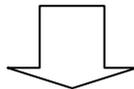
- ・ 小学校入学後、疾病による弱視症状（中心暗点、視力低下等）が出現したため、弱視級に入級。支援を受けながら、日常生活は交流級で送っている。
- ・ 交流級では視覚補助具としてiPadを使用。他の補助具（傾斜机、単眼鏡、ルーペ）は持っているが使っていない。弱視学級では拡大読書器を使用している。
- ・ 拡大教科書（教科書会社版26ポイント）と、手書き拡大写本（42ポイント）を使用。プリント類は、24ポイント以上のゴシック文字で作成。
- ・ 課題は、①身体症状の受容 ②視覚補助具使用の抵抗感の克服 ③気持ちや要求を相手に伝える表現力の育成 ④体調の維持と精神の安定（身体・眼精疲労の軽減） ⑤将来へ希望を持つことと考えた。

### 2 活動の目的

(1) 当初のねらい

Aさんの自己肯定感を高め、将来への希望が持てるような支援や、Aさん自身が新たな認識に立って自己変革に必要なセルフマネジメントを行っていかれるような支援が必要だと考えた。

- ・ 5年生後半からキャリア（進路）について考える機会を継続的に作った。その結果、Aさんは地域の中学校へ進学し、弱視学級担任の支援を受けながら通常学級で学びたいという希望を持つようになった。
- ・ 弱視を持つ社会人Bさんと出会い、次のように励まされた。「障がいはAさんのせいではない。誰のせいでもないが、なってしまったものはしかたがない。Aさんのせいではないのだから、便利でかっこいい道具を使って、楽にがんばっていけばいい。からだを大事にしながらがんばっていけば、なりたい自分になれる」その後Aさんは、少しずつ視覚補助具との共生を積極的に許容できるようになった。
- ・ 国立特別支援教育研究所の田中良広先生から「iPadの自立活動への活用」についての示唆をいただいた。
- ・ 慶応義塾大学中野泰志先生から「弱視学生のiPad活用」についての情報をいただいた。
- ・ 横浜市立盲学校の教育相談でiPadに直接触れる経験をさせていただいた。



このような支援経過とともに、AさんにiPadへの関心が高まってきたため、中学校進学を見据えて、Aさん・保護者・担任が話し合い、iPadの導入を検討した。

iPad活用に期待することは ①iPadが視覚補助具として自分の生活に生かせることを知り積極的に活用しようとする事 ②交流学級の授業でiPadを活用し、日常生活で視覚補助具を使うことへの抵抗を減らすこと

③iPadを活用すると自立的な学習活動ができることを経験し、自信を持つこと ④進学先の中学校生活でもiPadを活用できそうだという見通しと意欲を持つこと ⑤中学校以降の進路や将来に対して希望や明るい展望を持つことだと考えた。6年生進級時から学校生活でiPadを導入・活用し、Aさんが課題の解決に向けてどのように変容していくかを観察することを目的とした。

## (2) 実施期間

4月下旬より3月まで。交流学級での学週場面および校外学習場面でiPadを使用。

## (3) 実施者と対象児の関係

特別支援担当教員、交流級担当教員、理科TT担当教員、家庭科専科担当教員

# 3 活動内容と対象児の変化

## (1) Aさんの事前の状況

視覚補助具（ルーペ、ポータブル拡大器、単眼鏡、傾斜机）の機動性の低さを嫌い、使用を避けることが多かったため、心身に負担がかかり、疲労が蓄積して体調を崩すことが多かった。

## (2) 活動の具体的内容

### ①iPadの導入—交流級児童への指導及び校内支援体制—

- ・ 交流級の児童に対して、Aさんの身体状況やそれを補うために視覚補助具が必要であることや、iPadは学習道具であるから遊具として借りたりはよしとしないこと、Aさんをいつもどおり自然に受け止め支えてほしいと話し、理解を求めた。
- ・ 職員に向けて、Aさんの視覚補助具としてiPadを活用する方針を伝え、共通理解を図った。
- ・ 支援級担任がコーディネーターとなって交流級担任や各専科担当教員と連絡を取り、できる範囲で教材を事前に提供していただくことや教科指導中のiPad活用を後押ししていただきたいことをお願いした。データ化できる教材はiPadに保存し、Aさんが活用できるように準備した。

### ②アプリの活用

- ・ 社会科等の副読本は拡大版がないため、出版元に許可を取った後スキャナ→PDFデータ保存→iBooksアプリに取り込んだ。図表や写真等はピンチアウトで拡大して確認することが可能になった。
- ・ PCでのインターネット検索（調べ学習）や作文の打ち込みは、カーソルの位置合わせやマウス操作で苦労した。iPadではそれが不要になるのでAさんの負担が減るのではないかと考えた。
- ・ Aさんからの申し出に応じて支援者がメモ用紙に太字マジックで書いて示してきた、板書の文字の確認等は、カメラ機能を使って板書を撮影しピンチアウトで拡大することで試写がしやすくなると思った。また、入力文字拡大アプリを活用すれば、常に支援者が付き添う必要が減って自立的に授業を受けることができるのではないかと考えた。
- ・ ボイスオブデージーを使ってマルチメディアデージー版の国語と社会の教科書をダウンロードした。手元で写真や資料が拡大できればAさんの身体的負担が減るのではないかと考えた。

### ③校外学習での活用

- ・ 予定された4回の校外学習（鎌倉社会見学（6月）、地層見学（9月）、修学旅行（10月）、写生大会（11月））でもiPadを使う練習をしようとAさんと話し合った。学級以外の人前でも視覚補助具を使う練習をすれば、中学校進学につなげることができるのではないかと考えた。

## (3) Aさんの事後の変化

- ・ iPadを学校で使い始めた日は、緊張した様子で周りの反応を気にしていた。  
「iPadを使うとみんなにわいわい言われたり、邪魔をされたりしたら嫌だなと思った。でも、みんな普通にまわりから見ててくれた。自分が思うより、iPadを使う自分に普通にしてくれた。だからわたしはiPadを使えるようになったと思う」  
と後にAさんは話した。翌日のAさんはすっかり落ち着いた様子になり、教科書とノートとiPadを自然な表情で机上にそろえて授業を始められるようになった。
- ・ 大文字入力アプリやカメラ機能を使い、不明の漢字を確認したり板書を撮影して試写したりして自立的に授業を受けることができた。支援者が常に付き添うことが減った分、必要な支援を友だちに求めることが

スムーズにできるようになった。板書の試写を時間内に終わられなくても、自宅に帰ってから続きを完成させることができるため気持ちに余裕ができた。

- 家庭学習に必要な資料をメールに添付して自宅にいるAさんに送信して活用してもらったり、Aさんからの相談メールを受けとって翌日の指導に生かしたりするなど、家庭と学校をiPadでつなげることができた。
- 副読本やプリントの図表が画像拡大機能によって少ない努力で見ることができた。心身への負担が減り、余裕ができて意欲的に授業に参加できるようになった。
- これまで授業中に提示される教材は、説明を聞いて理解してきたAさんだが、あらかじめiPadに取り込まれた教材を他の児童とのタイムラグなしで手元で見ることができるようになり、学習意欲が高まった。また、他児がテレビで視聴する教材資料を、AさんはiPadで見て授業を受ける場面があった。iPadの情報を学級全員で情報を共有する楽しさが味わえたようだ。
- ボイスオブデジアプリを使ってデジ版教科書を活用した。図表や写真を細部まで確認できるのでとくに社会はとても役に立った。国語は手書きの拡大教科書のほうが見やすかった。中学校でも大いに活用していかれそうだという見通しが持てた。
- PCに比べて、確実な操作で、簡単に作文やインターネット検索を行うことができるようになり、心身の負担が減って余裕ができた。
- 6月の鎌倉社会見学ではiPadを使うことはできなかった。学校外で使える気持ちが整ったのは、自信を持ってiPadが使えるようになってきた9月の地層見学以降である。必要な時はすすんで友だちに支援を求められるようにもなった。クラス以外でも使える強い気持ちが育ってきたと感じた。
- 修学旅行では一般観光客に混じって使用できた。写生大会では地域の人々の目を気にせず、楽しそうにiPadを使うAさんの姿が見られた。
- 写生大会では次のような手順で作品を仕上げた。
  - ア 教員が、カメラ機能で写生場所の様子を事前に撮影。港を中心に360度の風景動画を準備した。
  - イ Aさんは事前に動画を見ながら、描きたい風景のイメージを持った。
  - ウ 写生風景イメージと、写生の見通しを持って当日を迎え、出発。
  - エ 実際の場所に行き、風景を見ながら決めた場所で写生開始。風景を撮影し、ピンチアウトで拡大しながら画用紙に下絵を描いた。「真っ直ぐな線が引けないので手伝って下さい。」「島のところがどうなっているのかわからないので描いてください」と自分から支援を求めることができた。
  - オ 風景が完成するが、手前に港の景色を加えることにした。
  - カ 気に入ったアングルで船を撮影し、風景に船を描き足して下書きを完成した。
  - キ 帰校後、採色して写生を完成させた。



### 3 活動内容と対象児の変化

#### (1) 主観的な気づき

Aさんは「あのiPadを自分が使うの!？」と、最初から期待と可能性を感じていた。友だちの「わあ〜かっこいい。わたしも大人になったら使いたい」という声が励みになった。iPadは羨望の念とともに広く認知されている先端機器であり、弱視者のみのための視覚補助具ではない。iPadの格好よさは思春期の心に響き、Aさんに勇気を与えた。

アプリを使い始めると、試行、失敗、パニック、また試行の連続にいらだちを感じることもあったが、家族や教員から支援を受けて使ううちに「慣れて、楽しくなってきた」「iPad って頭いいと思う。反応が速いから他の道具たちと違う。iPad は人みたい。一緒に会話をしてるみたい。」と親しみを感じるようになった。

半年後には「iPad 使う前って、わたしどうやってたんだろ!？」「単眼鏡やポータブル拡大機は、『その時に』使う。でもiPad は『どんな時にも』使える。iPad が無いことが考えられないくらいのもんです。」と iPad とのパートナーシップを明るく話せるようになった。

## (2) エビデンス

表1に、Aさんの実感している『iPad活用の目的達成評価』を示した。Aさんはどれも満足そうに高い評価をつけた。④についてやや評価が下がっているのは「この先新しいアプリを見つけたとき、それが使いこなせるようになるまではまた苦労があるかもしれない、と考えて4という評価にした」と答えた。

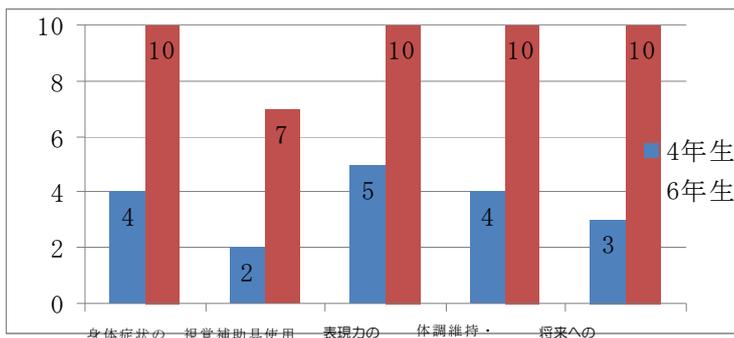
表1 iPad活用の目的達成評価 (評価: 5達成できた 4まあまあできた 3どちらともいえない 2あまりできなかった 1できなかった)

①iPadが視覚補助具として自分の生活に生かせることを知り、積極的に活用しようとする事ができた	5	4	3	2	1
②交流学級の授業でiPadを活用し、日常生活で視覚補助具を使うことへの抵抗を減らす事ができた	5	4	3	2	1
③iPadを活用すると自立的な学習活動ができることを経験し、自信を持つ事ができた	5	4	3	2	1
④進学先の中学校生活でもiPadを活用できそうだという見通しと意欲、さらに中学校以降の進路へも明るい展望を感じ将来への希望を持つ事ができた	5	4	3	2	1

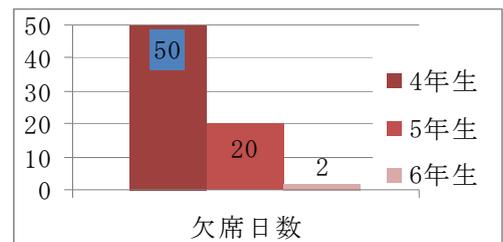
グラフ1に、5つの課題についてAさんの実感している『課題の達成評価』を表した。Aさん自身に4年生時と現在についてそれぞれ10点満点で達成度を評価してもらった。

また、グラフ2に、Aさんの4年生から6年生にかけての欠席日数を示した。

グラフ1 課題の達成評価 (10達成できた~1できなかった)



グラフ2 Aさんの欠席日数



「①身体症状の受容」課題は、4年生で4ポイント→6年生で10ポイント。「②視覚補助具使用の抵抗感の克服」課題は、4年生で2ポイント→6年生で7ポイント。「③気持ちや要求を相手に伝える表現力の育成」課題は、4年生で5ポイント→6年生で10ポイント。「④体調の維持と精神の安定(身体・眼精疲労の軽減)」課題は、4年生で4ポイント→6年生で10ポイント。「⑤将来へ希望を持つ」課題は、4年生で3ポイント→6年生で10ポイントだった。②の課題達成ポイントが低いのは、「iPadを平気な気持ちで使えるのはまだ学校の中だけで、外に持って行って使える気持ちにはなれていないから」と答えた。

Aさんはこれらの課題達成について「今の自分は10ポイント! 4年生の時はいっぱいいっぱいすぎて、①④⑤についてなんて考えられなかった。それほど毎日がたいへんだった。」「高学年になって、やりたいことや、やらなきゃならない仕事が増えて、今までのように休んでいられない、と責任感ができたのがきっかけになった。変わら

なきゃな、と思った。」「iPadを使うようになって、からだが大変じゃなくなった。今はとにかくよく寝て元気に過ごしている。疲れたらすぐに寝て、回復したらまた動き始めている。」「今は未来のことを考えられるようになったし、未来のことを考えると『おもしろそう〜』と思えるようになった。」と愉快そうに答えた。

課題が達成できるようになったことと比例して、Aさんの欠席日数も変化した。Aさん自身の変化が、良い状態で学校生活を送れる要因となっていることが推察された。

### 3 その他のエピソード

卒業アルバムの文集に、Aさんは将来の夢をつづった。作文は、入力文字拡大アプリで作成した。文字入力パットでローマ字入力ができ、黒地に白い文字で表記されるのでAさんにも見やすい。文字の大きさを11段階で変えられ、メール送信やカメラ撮影保存もできる。校正や誤字脱字の確認は、Aさんと担任とでメールをやりとりしながら行った。

完成した作文には将来の夢や、夢を持てるようになった経緯、両親や友だちや先生に支えられて成長できたことへの感謝、進学への期待と決意が記されていた。Aさんの保護者はこのようなAさんの成長と変容をととても喜んでくださった。

中学校に進学したAさんが、これからも明るく前向きに学校生活を送ることができることを願いたい。